

# みめぐみの

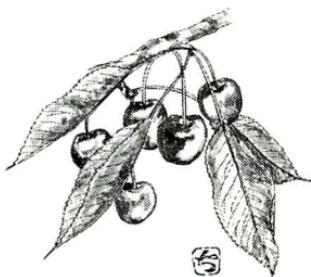
第16部





# みめぐみの

## 第16部



大谷光道著

### 目次

「他力」つて	3
潤いのある日々を求めて	3
「いただきます」、	
「ごちそうさま」	5
精進料理	
人間の悪い癖三つ	
覚り、聖道門	
淨土門	
念力	
素顔の元	
活きる	
読者の貢	
あとがき	

31 29 26 25 19 17 15 10 7 5 3



以前にも『元気』や『信じることが生む可能性』と題する講演録をまとめました（『第九部』『第十二部』）。今回もお寺以外で「真宗の教え」を広くお伝えする機会として、「国際ソロプロミスト三田」（さんだ）の講演会（兵庫県三田市）に出掛けました。

内容的にはこれまでとは視点を変えてお話ししてみたので、浄土真宗のコマーシャルをしてくださるときのご参考にでもなればと思います。

（著者註）

# 「他力」つて

潤いのある日々を求めて

ただいまは過分のご紹介をいただき、恐縮に存じます。この度は「国際ソロプロチミスト三田」の皆様方からのお声掛けによりお話をさせていただくことができ、たいへんありがとうございます。また皆様方、日ごろから社会奉仕に情熱を傾けておられますこと、まことに尊いことと心より敬意を表するところでございます。

ご紹介の中に母（大谷智子）の話も出ましたが、日本でソロプロチミストの活動が始まつたころ、湯川秀樹夫人と裏千家の宗匠夫人とご一緒に、何か、お世話をさせていただいていたように思います。母がどんなお世話をしたの

か、大してお役に立てたとは思いませんが……。しかし、ソロプロチミストとの深いご縁を感じます。

このごろは日本中、いや世界中がサッカーで沸いております。できるだけ日本戦は見たいなと思つてているんですが、こないだ対口シア戦を見る時間があり、ゴール・キーパーの活躍が目に止まりました。やつている人達にとつて「後ろで守つてくれてる、しつかり守つてくれている。」というのは、当たり前のことが、ずいぶん心強いことだらうと感じました。

戦争のころ「銃後じゅうごを守る」のが女性の仕事であると言われていたようですが、主婦の方はそのようなお役目がふだんからあるんじやないでしょうか。ご家庭によつては夫婦の役目が逆さまのところもあり、あるいは一人でフォワードとゴール・キーパーを兼ねておられるお宅もあります。攻撃役のフォワードはかつこよく華々しい役目ですが、後ろで守つているというのはたいへんなことです。

同じような話で、孔雀はオスのほうがきれいで人間とは一見逆のように思えますが、見方によつては人間も同じで、「えーかつこ」のできるところは男のほうがすぐに前に出たがるような、そんなことも頭に浮かんだりして、この間のサッカーを見ておりました。ゴール・キー・バー役の女性はたいへんだな、と思います。

## 「いただきます」「ごちそうさま」

ふだん「私は、仏教とはあまり関係がない。」と思つている人でも——手を合わせるかどうかは別として——食事の前に「いただきます。」、食事の後に「ごちそうさま。」と言う人が、若い人も含めてほとんどのようになります。

その意味を考えてみるとまず第一に、私のために食事を作ってくれた人、食材を収穫してくれた人、そしてそれを運んだり加工したりしてくれた人、そういう無数の人達に対しての「ありがとう。」という感謝の気持ちですね。

次に、私のために命を失うことになった牛、豚、あるいは魚、——野菜でも命があります——そういうものたちに「ごめんなさい。」といふ詫びの気持ちです。これら二つの気持ちが含まれていると思います。

そして第三に、食べられるほうの身になつて考えると、「ごめんねです」とされたのでは、たまつたものではない。」ということになります。自分が殺されるわけですからね。「お前たちの命を奪わないと、私が生きていけないんだから、しようがないんだ。」というのは人間の勝手な理屈なんだということも、わかってきます。食べられるほうと食べるほうの逆の立場、ものの命を大切にするか私が生きていくかという相反する関係、このジレンマを味わわせられます。そういう私自身の姿、置かれている位置を見出させてもらつたという意味の合掌でもあります。

このような三つの気持ちに出会う「いただきます」と「ごちそうさま」だと、いまさらのごとく気づきます。

## 精進料理

そんなことから、「せめて動物だけでも殺さずにおこう。」というのが精進料理ですね。精進料理はあつさりしていく時々はいいんですが、ずっとあれで通すということになるとちょっとたいへんなことで、私なんか生臭を食べつけている者には不可能な修行だと言えそうです。

これは食べ物ではないんですが、九年前に蓄膿ちくのうになつた時のことを思い出します。ある朝、激しい頭痛がして



蓮如上人の御影に参拝する稚児たち（今年の御影御下向・金津町）

二・三時間は居ても立ってもいられないほどでした。ところが、あれは何だ  
ったのかと思うほど、昼からになるとすっと痛みが消えました。これが毎日  
繰り返し続くので医者に行つたら、「アレルギー性鼻炎です。すぐに良くな  
りますよ。」と言われたんですが一向に治らず、もう一軒行つた医者も同じ  
診断でその後も治らず、とうとう救急に飛び込むことになり、「これは蓄膿  
ですよ。」と言われました。こんなことをして毎朝のたうち回つているうち  
に、一週間たつていました。そして気づいたら、「あっ、タバコ吸つてない  
わ。」タバコが止まっていたんです。

これは「勝手に止まつた」ので、私の意志でタバコを我慢して止めたので  
はありません。それ以後今日まで吸つておりません。蓄膿のお蔭でタバコが  
止まりました。タバコを止めたいお方は蓄膿におなりになることをお薦めし  
ます（笑）。

ほかから押え込まれてしまえばいとも簡単に止まってしまうタバコでも、

「他力」って

自分の意志では止めることができない、情けない私だなと思いました。タバコをお吸いになつている方はおわかりかと思いますが、「止めようとすればするほど吸いたくなる。」でしょ。変なものですぐタバコつてのはそういうもんだと思います。

そしてまた似たようなのですが、去年から狂牛病で半年ほど大騒ぎが続きました。しばらく私は牛肉を食べませんでした。これは、この機会に精進料理の生活に少しでも近づこうとか、牛がかわいそعدだからとかいうんじやなくて、怖いから食べなかつたんです。これも私の意志や信念で我慢して食べなかつたのではなくて、ほかからの影響でしばらく食べなかつただけのことです。

当時、狂牛病については連日放送されていました。ある番組でイギリスで二十歳ぐらいの狂牛病患者の女性と、そのお父さんが彼女の口に食事を運んで世話をしている場面がありました。「私も同じ物を食べているので、何時

発病するかわかりません。」とお父さんが話し、後ろに掛かっているその患者の元気なころの大きな写真と、今映っている現実の姿との対照にショックを受けました。これを見て急に怖くなつて、牛肉を食べなくなつたという次第です。

狂牛病にかかる確率が極めて低いことはよく知っていますが、「その何万分の一か何億分の一か、それに当たつてしまふと何の意味もないことになる」と考えると、確率というのは見方によつては何の当てにもならないものに思えてきます。

## 人間の悪い癖三つ

我慢する、自分の意志で欲望を抑えるのは容易でないことを、私のタバコと牛肉の例でお話ししました。

私たち人間には「欲」と名のつくものがいっぱいあります。食欲、物欲、

「他力」って

金欲、名譽欲、性欲……、その他「欲」のつくものすべてそうです。そこで例えば物欲についてみると、何か一つ買い物をするとすると、もつと良い物、もつと高い物、もつとたくさんの中の物が欲しくなる。一つの欲ではなくて、欲が次の欲を呼んで際限なく膨れ上がっていく、こういうのを貪りといいます。欲がただの欲でなくなり貪りとなると、私たちはこれに振り回され、心を奪われ、とらわれて、穏やかな平常心を失ってしまいます。

もちろん貪りも程度の問題ですが、例えば、「あの人はお金持ちになつて、人が変わった。」などと言われるようになつたりすると、これはちょっと只事ではありません。昨日まで穏やかで優しかった人が、急に我利我利亡者になつてしまふ。昨日までの自分を失つた上、大切な友達も失つてしまう、ということになります。貧乏人のひがみかもしれません、「お金持ちになつて急に気前よくなつてお金をばらまくようになつた」ということは聞いたことありませんね（笑）。逆になるんですね、不思議と。



餓

生前に嫉妬深かったり物惜しみやむさぼる行為をした人は死後、餓鬼道に落ちる。絶えず飢えと渴きに苦しみ、咽喉はきわめて細く、腹部はふくれ、飲食物を口に近づけるとすべて炎となり、口に入れることはできない。

(『平凡社百科事典』『岩波仏教辞典』より)

「他力」って

貪りの意味は、「貪といふは、人のものをほしと思ひ、わが物を惜しと思ふなり」（『宝物集』）という説明がわかりやすいですね。  
だいたい私たち人間には三つの悪い癖がありますが、その第一番目がこの「貪欲」（むさぼり）です。

悪い癖の二つ目は、「瞋恚」といって、怒りとか憎しみが問題を起こします。先ごろ、前の車が辛氣くさいと腹を立てクラクションを鳴らして、それが喧嘩の元になつて殺人事件に発展するということがありました。これは他人事とは思えません。私も車を運転していて前に辛氣くさい車がいるとすぐに鳴らしてしまいます。横に家内が乗つていたりすると、叱られるというのが常のことです。

このように我がを通す、我儘ねがままを通そうとすることから怒りが生まれます。これが大きくなつて国と国との戦争が起ころのも、同じ原因によるものと言えるでしよう。このように、怒りに心を奪われて平常心を失い、時には物理的

にまで自分自身を損ねることになります。

「心を鬼にして……」という場合などは、人のためにわざわざ心を鬼にすることなので、これは怒りとは趣旨が違うと思いますが、二番目の悪い癖ということのは怒りが怒りを呼ぶということです。

それから三つ目は「愚痴ぐち」です。これは日常よく使う言葉でもありますが、「ああしたらよかつた。」「こうしたらよかつた。」それを言つても何の意味もない、何の効き目もない、何の足しにもならない、そんなことをくどくどと言ふのを「愚痴」といいますね。

聞かされている者は不愉快でたまらない、何かをやろうと思つていてもやる気がなくなってしまう、全く建設的でない、そういうのを愚痴。「もう、その話はええやないか。言うても仕方ないやろ。そんな話、やめてくれよ。」というのが愚痴で、迷惑極まりないものです。「愚痴を聞いてやる。」ということばがあるように、人に嫌な思いをさせるものです。また、愚痴を言つて

いる間は同じところを堂々巡りで、進歩がありません。

これら三つの悪い癖のために心を奪われ振り回されているのが私たちの日常の姿で、煩わしく悩まされるので、これを煩惱ぼんのうといいます。

## 覚り、聖道門

煩惱を克服して、まことの、本当の自由の境地——覚りの境地——に至ろうとする、達しようとするのが仏教の究極の目標で、覚りに到達した人を仏と呼びます。ですから、仏教はお釈迦様の教えであることはもちろんですが、それと同時に仏になる教えでもあるのです。

仏になる、覚りを開く方法には大きく分けて二つあります。

まず第一に、色々な修行を積み重ねることによつて、煩惱を抑える、あるいはなくして、覚りに向かおうとする教えを「聖道門」といいます。また、自分自身の強い意志とたゆまぬ努力によつて修行を進めるので、「自力」の

教えともいいます。

そこで、教えを理解すれば覚りを開いたことになるのならば、こんな簡単なことはありません。教えを頭で理解することは必要なことではあっても、覚りとは無関係なことと言つても過言ではありません。何故なら、教えを理解しても煩惱がなくなつたわけでもなければ、仏の徳が備わるわけでもないからです。

このように、頭で何とかなるわけでもない。そして何か「技」わざを磨くといふ類のものでもありません。例えば歌や踊りであれば練習して上達するというものですが、そういうものでもないわけですね。

やはり、修行を積むことで徳が磨かれ、いつの日にか開けるものが必ずあつて、真理に到達する、そういうことでなければなりません。いや、私自身が覚つていなかから、また私自身自力の修行を何か一つでも行なつたわけでもなく、それどころかタバコや牛肉で騒いでいる程度ですから、上手に言え

「他力」って

ないのであります、仮に上手に言えたとしても、それを聞いた人が覺りを開けるという、そんな簡単なものでもありません。

我が国で聖道門に属する宗旨は、華嚴宗けごんしゅう、法相宗ほっそうしゅう、律宗りつしゅう、天台宗てんたいしゅう、真言宗しんげんしゅう、禅宗、日蓮宗、等々です。

## 淨土門

これに対して、聖道門のような過酷な修行をすることができない、とてもそんな我慢とか、むつかしい、しんどいことはできないという人のための教えで、もっぱら阿弥陀仏という仏様のお力によつて成仏しようという人——こういう人を「凡夫ぼんぶ」といいます——のための教えを、「淨土門じよどもん」といいます。

我が国で淨土門に属する宗旨は、淨土宗、西山淨土宗せいざんじゅう、時宗じしゅう、等々、そして私どもの淨土真宗です。

阿弥陀仏という仏様は、「凡夫にはろくな修行はできない。」と心配して、凡夫のために極楽（国、場所）を作つて「必ず迎えてやる。そして成仏させてやる。」という強い願い（本願）を起こし、長いご修行の結果この願いを達成されました。この願いがパワーとして働くので、その力を「ほんがんりき本願力」といいます。

この本願力のことを別名、「たりき他力」といいます。こういう力なのでまたこれは「仏力」でもあるわけです。三つとも全部同じ意味ですが、この三つの用語のうちではどちらかと「他力」と「本願力」をよく使います。

やつとここで今日の本題の「他力」に到達いたしました。

時々、「他力本願では駄目だ。」という発言があつて問題が起ります。これははどういうことかとすると、他人の力、つまり「自分は何もしないで他人を当てにして、他人にさせておいて、事を成し遂げたことにしよう」という、ずるい「人頼み」の意味に「他力本願」という言葉を使つてしまふことから

起ころる問題です。他力とは本願力。これは阿弥陀様のパワーですね。ですか  
ら普通の人間の力ではとても及ばない、比べものにならない、強力な力です。  
この「他力」（仏力）を「他人力」と混同して、仏の力と人の力をごっちゃ  
にしてしまうというとんでもない間違いを犯しているのです。

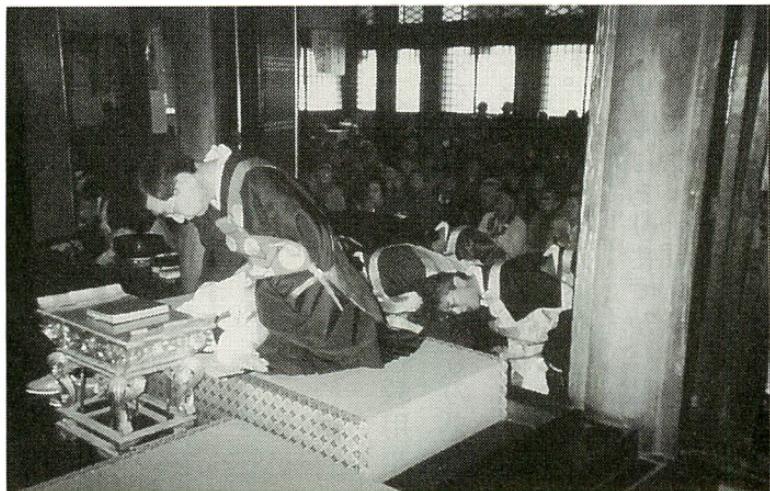
## 念 力

テレビの話をよく引き合いに出しますが、「念力」——これは仏教用語では  
ありません——というのがありますね。見えないところにあるものを当てるた  
りとか、「へえー、本当かいな。」というような番組がありますね。

その一つにスプーンを曲げるのがあります。何も力を入れないのにスプー  
ンがぐーっと曲がる。確かに一つの不思議な力ではありますが、私はあれを  
見ていつも不思議で、どういう疑問が出てくるかといいますと、「なぜスプ  
ーンだけが曲がるのか」が私は不思議なんですね。スプーンが曲がるのに、

ナイフとかフォークはあまりやつてくれません（笑）。一度、テレビ局へ行って聞かんならんなど思つてますが：（笑）。スプーンが曲がるぐらいなら、ビルを建てる鉄骨ありますね、あれで曲がるはずです。そうでしょ。どうせ手に力を入れなくとも曲がるのなら、もつと太い鉄骨でもひゅつと曲がるはずです（笑）。

でも、今日は話の材料に使わせてもらつて、ありがたいなと思つております。ああいう力を、スプーンの曲がる力を信じるくらいなら、この「他力」



御下向に際して坂東曲を勤める（永宮寺）

「他力」って

を信じてください。これは本物ですから。本当に私たちを極楽というところへ連れて行つて成仏させる、修行も何もしていない者を覚らせる、そういう強力なパワーです。阿弥陀仏という仏様はもっぱら凡夫を迎えて覚らせるというのが「本職」で、何時も私たちを限りない光明で照らしてくださつているのです。

そこで、この力が、迎え取つてやろうという、強い願いの力の存在することに私たちが気がつく、これが大切なことであります。気がつかないうちはその力が及ばないからです。その気づいた心を「信心」といいます。こういう状態になると、「南無阿弥陀仏」という念仏——「念佛」はほかにもありますぐ、私どもが念佛というと「南無阿弥陀仏」のことですが私たちの口から出て来る、言葉、音声となつて出て来ます。ですからこの念佛は「阿弥陀様からのメッセージが届きました。ありがとうございます。」という印であります。

先ほどくどくど申しましたように、私たちはだいたい煩惱のかたまりです。私のこの体を切つていっても、ほとんど煩惱しか出てこないような煩惱のかたまりであり、これを凡夫というのですが、そういう煩惱のかたまりに、信心という心、これがひとつくわけですね。この二つが合体するんです。こういう状態が私どもの浄土真宗の信仰の形です。そして「信心」というのは、阿弥陀仏の本願力に気がつくまではなかつたわけですよね。昨日までなかつたものが、今日からあるわけですね。ですから、それは阿弥陀様から頂戴したものだ、ということがわかります。

そこで、信心をいただいたから仏様のようになるかというと、そうはいかない。それは当たり前です。なんでかというと、煩惱がなくならないからです。今生きているうちは煩惱はなくならないけれども、「この世界での現在の命が終わると、極楽へ行つてそこで覺りを開いて仏になる。」、そのことが今決まる。生きてるうちに決まる、死ぬ直前じやなくて。「生きている今決

まる」ところが浄土門の中でも浄土真宗の大きな特徴であり、この安心感と喜びが私たちの信仰の中身です。別の言い方をすると、「信心」というのは、今仏になるのではないけれども、やがて極楽に往生して仏になるという「予約切符」だと思ってください（笑）。いやほんとに。

明日楽しいことがある、そういう計画をお持ちのときは、必ず今日から楽しくなりますね。明日の朝まで楽しくない、そんなことはない。待ち遠しくて仕方がない。それと同じで、信心をいただくことによつて、その喜びのために世の中が変わる、絶対変わります。自信に満ちた、穏やかな、楽しい、毎日に変わります。「潤いのある毎日」に……今日の副題にありますね。

ですから、今は煩惱と信心の同居した状態だけれども、この世の命が終わると同時に煩惱が自動的に消えるので、信心だけになる。信心だけになるから、自動的に仏様になる、成仏する。分かりやすいでしょう。わかりにくいでですか。これが他力の教えであります。

南無阿弥陀仏という六字の中に阿弥陀様という仏様のお徳ですね、あらゆるお徳がぎゅっとパックされております。「南無阿弥陀仏」と口で称えることによって、そのお徳が私のところに届く。信心が私のものになつてからの生活は、「南無阿弥陀仏」のパックを開く生活になるのですから、「絶対変わります。」と私が申し上げる理由もおわかりでしょう。

「そんな簡単にいくのか。」と思われるかもしませんが、一度やつてみてください。たぶん、たぶんそうなります。「たぶん」というのは、本物の念佛でないと駄目ですからね。ただ口だけで「南無阿弥陀仏。」じやなくてそこに信心がひつついている、それで本物になるわけです。本物かどうかの目安は、「南無阿弥陀仏」のパックを開いたとき、「ありがとうございます。」という思いが体に溢あふれてきたらOKです。「お金がもうかりますように。」とか、自分が良くなる願い事が浮かんでくれば、今一だと思ってください(笑)。「お願いのお念佛じやなしに、お礼のお念佛なのよ。」——私の小さい

頃、母のくれたひと言が思い出されます。

でも、あまり難しく考えず、「論より証拠」。称えてみてください。

## 素顔の元

塗料メーカーに勤めている友達がいます。同窓会で会った時でしたか、「最近は日本の車もどこのメーカーのでもほとんど変わらんようになつてきました。だからこれからは塗装が勝負なんだ。」と言うので、○○ペイントのコマーシャルだと思って聞いてましたら、「同じ色でもその下地によつて違つてくる。例えば同じ赤でも下地に黒を塗つてから赤を塗ると、下地に白を塗つてから赤を塗るのでは、仕上がりはがらつと違う。黒の上に赤を塗ると沈んだ静かな赤になるし、白に赤だと華やかな赤になる。」という話になつたので、耳をほじくり直しました。

「素顔」という言葉があります。素顔、普通の顔、お化粧しない顔。皆様、

お化粧なさっていると思いますが、お化粧はいくら上手になさつても素顔は変わらない、でしよう？（笑）

それみたいなものですね、性格であるとか振る舞いであるとか、そういうものは素顔と同じで、お化粧と関係なしに滲にじみ出てきて、どうしても隠せませんね。メッキがはがれるとも言いますが、化粧とかメッキははがれますけれども、信仰は私たちの振る舞いの元、素顔を「作る元」です。信仰で皆様方のお化粧をどうこうするという、とてもそういうことは化粧品メーカーのお仕事であって、私どもの及ぶものではありませんが、信仰によつて素顔は必ずきれいになるはずです。

## 活きる

先日、医者をしている友達が、何人も診みてきた経験から「仏教でもキリスト教でも、とにかく信仰を持つてる人は亡くなるときに『ありがとう』、『あ

りがとう』と何度も感謝して逝かはるよ。たぶん行き先が、自分の行き先がわかつてゐからやろうと思うよ。』と、聞かしてくれたのがたいへん印象的でした。

ただ、急いでですね、急いであちらへ行こうなんて考へる必要はもぢろんないんですよ（笑）。ただ、行き先を決めておく——さつきの話と重なりますが——それは非常に大事なことだと思います。それを決めておかないとどこへ行くかわからぬ（笑）。先を決めるによつて今がですね、現在、今がいきてくる——この「いきる」は「生」じやなくて「活」のほうですね——今が活けるんです。まさに「備えあれば憂えなし。」ですね。脅かすわけじやないんですけど、いつ何時どうなるかわかりません。「老少不定」と言いますね。年寄りが先とは決まつていなかることですね。私、今日はJRで来ましたけれども帰りにどうなるやらわからない（笑）。いやほんとに（大笑）。私だけじやない、皆さんもおんなじです。ですから、そういう

ことで行き先は早くお決めになつたほうがいい。これは何もね、いま浄土真宗のコマーシャルしてますけどね。どの宗教でもいいですから、何か信仰を持とうかなという気持ちになつていただきたい。なつておられるのかもしけませんが。

今日は、他力というのは他人力ではなくて阿弥陀仏の本願力である、必ず極楽に迎えてやるというパワーであると。スプーンが曲がる、そういうことよりもはるかに強く、はるかに意味のある力であつて、比べ物にならないパワーであると。だつて、私たちを極楽まで連れて行つてしまふ成仏させるつていうんですから、たいへんなパワーであります。「スプーンを信じるぐらいなら、この他力を信じましょう。」（笑）というのが、今日のお話の締めくくりでございます（拍手）。

お付き合いありがとうございました。（拍手）。

感想  
意見

富山県高岡市 匿名希望

『第十五部』ありがとうございました。「おひな様が阿弥陀様に見えてまいります」というところを読みましていただき、私の娘が小さい時おひな様の前で合掌して「なむあみだぶつ」と稱えたことを思い出しました、子供にはやはりおひな様も仏様に見えるのだなと思いました。娘も大人になつて今年は忙しさにかまけて飾るのを省略してしまいましたが来年はまた虫干しの意味でも飾らなければと思いました。

仏法を勉強したり聴聞しても、ともすれば驕慢になり勝ちで救われるどころで

はなくなってしまいます。そんな時光道台下の慈悲にあふれたお話しの『みめぐみの』を読ましていただくとともに良い解毒剤になり軌道修正させていただけます。ますますのご活躍を念じ上げます。合掌

東京都江戸川区 松岡忠男さん

いつも楽しく読ませていただきております。感謝をいたしております。私自身誠に不信心で不遜でご住職様等にはご迷惑をかけているのではと反省しているのですが、『報恩講』等の際にいただく貴誌の暖かさに一つ一つうなずきながら：本当はそんな能力もないのですがという気持ちです。



（写）

## あとがき

みめぐみの刊行委員会

寺院や門徒宅での御親教といった枠にとらわれず、色々な場所への講演の機会も増え、今回は六月十七日の「国際ソロップチミスト三田」でのお話をまとめて頂きました。国際ソロップチミストは、一二〇カ国、約九万五千人の専門職・管理職につく女性で構成される組織で、世界各地で奉仕活動に取り組んでおられます。

今回は講演録ということもあり、当日の会場の雰囲気を重視して執筆にあたつて下さいました。読者の皆様もその臨場感を味わいながら、「聖道門」と「浄土門」との違い、そして「他力」の捉え方など、分かつたつもりになつていて自分をもう一度日々の生活の中に見つめ直していくことが大切ではないでしょうか。  
読後感や生活の中で感じられたことを折り込みハガキをご利用頂きお寄せ下さい。

## みめぐみの 第16部

---

2002年7月5日 印刷  
2002年7月10日 発行

定価 200円

著 者 大 谷 光 道

発 行 みめぐみの刊行委員会

〒600 京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町754  
-8167 本願寺寺務所内

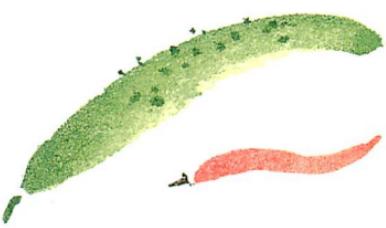
TEL. 075(351)3555 FAX. 075(351)3120

振替口座 01060-5-56990

印 刷 (株) 中 外 日 報 社

---





みめじみの刊行委員会刊